

# より良く生きる。―出居清太郎先生の世界― 第25回

山本博也

「二つで一つ」の世界観（その1）

（1）「奉誠会」ではなく「捧誠会」

捧誠会の「捧」は、「奉」に手偏を書く。

いわゆる神、仏だけを対象とする宗教であるならば「奉」でよく、すなわち「奉誠会」であって、神仏に誠を奉る会という意になる。

しかし本会は、「奉」るに手偏をつけて「捧」げるとした。これは神の道と人の道との合掌を表しているのである。

この世はすべて「二つであって一つ」である。この「二つ一つ」の世界観を持つてもらいたいと思った。人々はとかく、一つ、つまり一方だけにとらわれて判断し、もう一つを忘れ、置き去りにしている。そこに破綻があり、不幸がある。

（出居清太郎先生のことばから）

■神仏への畏敬と日常の行い

捧誠会の「捧」の字には 手偏がついている―手で何かをする、何か行いをすることの意味しています。つまり神仏に對して敬虔な気持ちを持つだけでなく、自ら行いをする、実践をすることを重視するということです。

ここでいう実践とは、祈るとか、お経を唱える、瞑想する、滝に打たれるといった宗教的な行いの実践という意味ではなく、日常の生活の中で、なすべきことを努力して行うことを意味しています。

すなわち神仏への畏敬と日常の生活での努力、これが「二つで一つ」だということとです。

逆行する。筋道を誤る。筋道を切つてしまふ。

(出居清太郎先生のことばから)

### ■生かされているとは

人は空気の中で呼吸をして生きています。水を飲み、動物や植物を食べて生きています。その空気や水や動植物は、人が作り出したものではありません。

内臓など人の肉体の働きは実に精妙なものですが、その設計を人がしたのではありません。

つまり人は自分で生きる前に、すでに生かされている存在だといえます。

**(2) 人間は生かされて生きている**  
人間は生かされて生きている。ただ生きていくのではない。生かされて生きているのである。ところが人々は自分の才覚で生きなければならんと考えて、生きることだけに夢中になり、生かされていくことを忘れ果てている。ただ生きよう、生きようとするから天地自然の真理に

さらに人が社会で生きていくことは考えてみればたいへんなことです。自分で考えて、自分で行動し、仕事をして、生活していかなければなりません。安定

して収入があり続けるといふ保証はないし、病気になるかもしれないし、災害に遭うかもしれないし、災害や災害に遭うかもしれないし…。

自分のこれまでの人生をふりかえってみても、危機的な状況、よく助かったな、ということが大なり小なりいくつもあるのではないでしょうか。それは自分の才覚で切り抜けたというより、たまたま親切な人に巡り会ったとか、なにげなく見ていたテレビから必要な情報が得られたとか、なぜかそのとき世の中の潮



ヒナゲシ 大西 恵

目が変わったとか、そういったことではないでしょうか。

それはいわば偶然ですが、その偶然の中に自分を救い、生かしているんならかの大きな力が感じられるのではないのでしょうか。今まで何をやってもうまくいかなかったと思っている人でも、今生きているということは、やはり生かされているということにはほかならないということではないでしょうか。

### ■生かされると生きるは二つで一つ

人の人生はいわば、自然や何か大きな力によって「生かされている」という土俵の上で、努力して「生きている」、というのが実態なのではないでしょうか。つまり「生かされること」——(1)の文章の「神の道」に通じる——と「生きること」

— (1) の文章の「人の道」に通じる—  
と、二つで一つということになります。  
「二つで一つ」ですから、どちらも欠いてはいけないわけです。

世の中はすべて「二つ一つ」であるのに、とかく人は一方だけにとらわれて、もう一方を置き去りにすると先生は警鐘を鳴らしています。

(1) での、「奉誠会」ではなくて「捧誠会」だというのは「生かされている」のだからといって、「生きる」努力をしないうというのではないということでした。

そして (2) では、自分の才覚だけで「生きる」ことだけに走って、「生かされる」ことを忘れ果てていることを強く戒められています。

## ■心のセイフティネット

自分は根本的に、大きな力によって生かされ守られているという思いをもつことは、いわば心にセイフティネットを備えることになると思います。

すべて自分の才覚で生きなければならぬ、救いの手などどこにもない、と思いつめたのでは、常に身構えていなくてはならず、心の休まる時がなく、あせって筋道を誤ることになります。

「生かされている」という思いに心をゆだねるならば、安心した、おだやかな気持ちになり、自分にも他人にもやさしく、暖かくなれるのではないのでしょうか。筋道を切ってしまうこともないでしょう。

発行所 〒170-0011 東京都豊島区池袋本町3-11-1  
修養団捧誠会 <https://www.hoseikai.or.jp>